摩利支天をめぐる言説と美術―日天との関わり

吉田典代

摩利支天は梵名をマーリーチーといい、摩利支天・末利支天・摩里支菩薩などと漢訳された。『仏本行集経』では、摩梨支とは陽炎のことを指すという。[1] 威光菩薩と称されることもあり、[2] 後には大日如来の化身ともみなされた。

摩利支天の最大の特徴は、「隠形」の功能すなわち他者の目から自分の姿を見えなくすることである。経典には、摩利支天は常に日（または日月）の前にいて誰にも見えないので、他者から害されることがない、と記されている。[3] そして、摩利支天を信仰する者にも同様の効果があるとされた。それゆえ日本では、戦場で生命を危険にさらす武将たちの信仰を集めることとなった。

摩利支天の姿は、唐代に漢訳された阿地瞿多訳『陀羅尼集経』巻十の「仏説摩利支天経」や、不空訳の『末利支提婆華鬘経』・『仏説摩利支天経』では、二臂の天女形と説かれている。[4] 左手には、維摩詰の前にいる天女が持つような扇を持つ。扇の文様は卍で、卍の曲がった箇所の内側には、各々日形が配置される。右手は与願印と規定されている。インドでは、古来卍は太陽を意味するという説もあり、太陽と関係の深い神であることが知られる。

宋代になると、天息災により『仏説大摩里支菩薩経』七巻が漢訳された。[5] 摩利支天の図像は十七箇所で示されてお

り、それぞれに差異がある。従来の図像と大きく異なるのは、三面六臂または三面八臂という、多面多臂の姿をとる点である。頭部には宝塔を戴き、持物として金剛杵・羂索・弓・箭・針・線・無憂樹・鉤などを挙げる。特徴的な持物である針と線は、寃家の口と目を縫い害を避けるためであるという。また、猪もしくは猪車に乗ることが説かれる。

こうした翻訳状況を反映して、中国では唐末～五代頃までは天扇を持つ二臂像が制作されたが、[6]宋代以降は多面多臂像が主流となった。[7]また明・清代には、チベット仏教の影響を受けた図像も見出される。[8]インドでは、パーラ朝以降の作例が確認されており、三面八臂で七頭の猪に乗る図像が多い。[9]

これに対して日本では、古代に遡る摩利支天像が現存しない。中世以降の作品も、数が少ない上に姿もまちまちであったため、研究はなかなか進展しなかった。[10]ただ諸尊法の口決や図像集などを検討すると、中国の動向とは異なる独自の展開があったように思われる。たとえば摩利支天法においては、天息災訳の経典が知られるようになって以降も、天扇を持つ二臂像が本尊であり続けた。また、阿修羅や日天と関わる文言が見出され、さらに摩利支天を男尊とみなす言説[11]も存在する。本稿ではそれらの問題点の中から、阿修羅及び日天との関わりに注目して検討してみたい。

1　阿修羅を惑わせる摩利支天

摩利支天に言及する日本の資料の中には、摩利支天が阿修羅の難を除いて日天を守護するという見解を示すものがある。たとえば成尊は、康平三年（一〇六〇）に著した『真言付法纂要抄』の「外護殊勝者」の項において、[12]

「又昔威光菩薩　摩利支天即大日化身也　常居日宮　除阿修羅王難」

と記している。しかし摩利支天が阿修羅の難を排除したなどという話は、管見の限り、摩利支天を説く経典にも阿修

羅を説く経典にも見出すことができない。

この言説が確認される最も早い文献は、天台宗の学匠・安然（八四一～寛平年間：八八九～八九八）の『摩利支要記』または『真言要密記』と称される著作である。残念ながら両者の原典は失われてしまったが、図像集や口決集等に逸文があり、その内容を伺い知ることができる。[13]

最も詳しく引用する承澄（一二〇五～八二）の『阿娑縛抄』では、「摩利支要記　安然云」として、以下のような内容を述べている。[14]

A　不空訳の摩利支天儀軌によれば、摩利支天菩薩は大日如来の三昧耶で、日喩三昧に入り、日天の眷属である。

B　天台宗が立脚する法華経では、娑婆世界主を梵天王と記すが、それは位を示したのである。次に出てくる尸棄大梵が名前である。（中略）世界が三災による終末を迎えた時、第四禅天より下界には有情が存在しなくなった。

C　ただ光音天が贍部界に下生して、毘摩質多羅阿修羅王を生んだ。

D　①毘摩質多羅阿修羅王は、天女のように美しい娘・舎脂をもうけた。

②毘摩質多羅阿修羅王は、舎脂を羅睺阿修羅王に嫁がせようとする。

③帝釈天は神通力で、舎脂を忉利天に奪い取った。

④帝釈天は毘首羯磨天に命じて、壮大で豪華な宮殿を造らせ、舎脂を住まわせた。

⑤二人の阿修羅王は兵を引き連れ、舎脂を奪い返すため天帝宮に攻めのぼった。

⑥日・月天子は浄光を放ち、阿修羅王の目を射た。

⑦羅睺阿修羅王は手を伸ばし、日・月天子を捉えようとした。

⑧摩利支天菩薩は方便で三歳小児の形に変じ、日・月天宮を覆い隠して、阿修羅王を惑わせた。
⑨（摩利支天は）隠形の法を用いたので、日・月天や阿修羅王は（摩利支天の存在を）知ることができない。
⑩（摩利支天は、）常に帝釈天に阿修羅軍を破らせる。
⑪或る説によれば、摩利支天が隠形によって日・月・天帝を守護するさまは、微鳥竹籠が前に懸かるかのようである。

E
①帝釈天は、毎月十六日に大品般若を講演する。
②般若十六神王の首領である深沙大将は、眷属を率いて阿修羅軍を割截する。
③阿修羅軍の身体は微塵に砕かれるが、不死薬のおかげで復活する。
④したがって十六日の闘争は終結することがなく、帝釈天は般若の力を渇仰する。
⑤それゆえ摩利支天は大方便神通力で、帝釈天を助護するのである。

F
『涅槃経』の説によれば、羅睺阿修羅王が手で月を遮ると、世人は月蝕が起こったと言う。しかし本当に月が蝕まれたわけではなく、手をどかせば元のように丸くなる。

なお心覚（一一一七～八二）の『鵝珠抄』「日月蝕事」[15]では、『阿娑縛抄』には引用されなかった部分も採録している。これをGとすると、

G
『尊勝陀羅尼経疏』所引の『伽陀経』によれば、光音天種であった毘摩質多羅阿修羅王の母が海中で一卵に変じ、やがてそこから一女が生まれた。九〇九頭・千眼・九口・四牙・二四手・九九〇脚の姿で、名は劣天。劣天は一卵を産み、そこから九頭・千眼・九九〇手・六脚の毘摩質多羅阿修羅王が生まれた。

このG部は、文安二～三年（一四四五～四六）に洛東・観勝寺の真言僧・行誉が編纂した類書『壒嚢鈔』[16]でも、

「安然和尚ノ真言ノ密記ニ云」として取り上げている。

さて、D部に示したような摩利支天が阿修羅を惑わせたことを記す文献は、平安時代後期以降、天台宗側・真言宗側ともに見出されるが、その多くが安然の文章をそのまま引用あるいは要約して用いており、安然の私記が宗派を越えて知られていたことがわかる。[17]

なお、真言僧・厳覚（一一世紀）の『伝授集』では、[18]

「不空訳儀軌云　羅睺質多二阿修羅為奪舎脂女　上天帝宮時　日月天子放浄光　照修羅眼眸　修羅以手欲執日月　摩利支有大勢力　方便現歳児形　翳日月宮殿　令修羅迷惑　今以隠形法　不令知日月天及修羅王」

と記し、阿修羅を惑わせる摩利支天というエピソードの出典を、不空訳の儀軌としている。先に挙げた『阿娑縛抄』所引の『摩利支要記』でも、A部の冒頭に不空訳の摩利支天儀軌の名を出しているが、『摩利支要記』における不空の儀軌の引用はD部まで含むのであろうか。というのも、現在知られている不空訳の摩利支天の経軌には、摩利支天が阿修羅を惑わせる話が登場しないからである。中国国家図書館に所蔵されている不空訳の摩利支天経の孤本にも、阿修羅との話は掲載されていない。[19] さらにB部では、世界主の名称や世界の構造について論じており、それは摩利支天の儀軌で語られるべき内容とも思えない。このような状況を考慮すると、現段回では「阿修羅を惑わせる摩利支天」は、安然が生み出した言説である可能性が高いように思われる。『伝授集』の文言は、安然の『摩利支要記』とおおむね共通することから、『摩利支要記』を参照したと考えられる。おそらく「不空訳」をD部まで含むと解釈したのであろう。

さて『摩利支要記』の説話の中には、出典が推測できるものがある一方で、原典が不明のものもある。たとえばC部の、光音天が下界に降りて毘摩質多羅阿修羅王を設けた話は、D部の導入となるもので、仏陀跋陀羅訳『観仏三昧

海経』に同趣の話が収録されている。ただ同経では、光音天→自然卵→一女人（九九九頭・千眼・九九九口・四牙・二四手）→毘摩質多羅阿修羅王（九頭・千眼・九九九手・八脚）の誕生という段階を経ており、[20] 安然説はだいぶ簡略化されている。

D部は、阿修羅王と帝釈天の戦いを述べる。阿修羅王と帝釈天が美貌の娘を原因として争う話は、竺仏念訳『菩薩処胎経』と『観仏三昧海経』に見出されるが、いずれも安然の説とはかなりの相違を示す。すなわち『菩薩処胎経』では、帝釈天が武力をちらつかせながら羅睺羅阿修羅王の娘に求婚したが、王に断られた。阿修羅王は帝釈天に先んじて戦をしかけるが、仏の加護を受けた帝釈天に散々打ち負かされる、という内容である。[21] 一方『観仏三昧海経』では、帝釈天は友好的に毘摩質多羅阿修羅王の娘と結婚した。しかし妻（名は悦意）が夫の浮気を疑って父王に告げ口したため、戦いが起こった、という展開になっている。

またD⑥⑦の項目、すなわち戦いの際、日・月天が光を放って阿修羅の目を射たという事項は、般若流支訳『正法念処経』の説と一致する。[22] ただし『正法念処経』では、阿修羅王が天女を見ようとして日・月に邪魔されたことを争いの原因とする。

E部では、帝釈天が般若経に帰依する理由が明かされている。『観仏三昧海経』には、帝釈天が般若経の大明呪の力で阿修羅軍を敗走させたことが記されており、これをふまえているのであろう。[23] しかし深沙大将や十六日という日付の出典は不明である。

F部は月蝕が起こる理由について述べており、阿修羅が日月を覆うことで日月蝕が生じるという認識は、『正法念処経』でも示されている。

G部は毘摩質多羅阿修羅王の出生を述べたもので、先にふれたように、『観仏三昧海経』に同様の記述が見られた。

このように、『摩利支要記』は、阿修羅を説く複数の経典から事項を選んで編集したと考えられるが、だいぶ省略や変容が生じており、出典不明の箇所も多い。特にD⑧の摩利支天が三歳に変じるという考えは、何を典拠とするのであろうか。

ところで、皇慶（一〇一六〜八一）の口決を書き付けた『四十帖決』（一一世紀）に興味深い記述がある。[24] それは、長久五年九月十一日付の「天女形」について述べた項目で、次のように記されている。

「又摩利支ヲハ陀羅尼集経ニハ云レ似二ト天女ニ一云々　其天ノ形　日天ノ前ニ如二三歳ノ嬰孩一日天不能見之　羅睺阿修羅王障二日天一時　摩利支放レ光指二羅眼一　修羅即退去求此放光者　不能見之　摩利支即隠身故也。」

ここでは摩利支天の放つ光が阿修羅の目を射たとあり、安然の説と小差があるが、注目されるのは「摩利支天は日天の前にいて、三歳の小児のようだ」という文言である。

日天の前というポジションと、三歳という小さいサイズから想起されるのは、一部の胎蔵界曼荼羅に見られる、日天の腹前にいる小天部像である。この小天部像が摩利支天とみなされ、摩利支天三歳説が生じたのではなかろうか。そこで次に、胎蔵界曼荼羅の日天の図像について検討しておくことにする。

2　小天部を伴う日天像

日天は十二天の一員として、胎蔵界曼荼羅の最外院・東方に登場する。日本で最も流布したのは、五頭立ての馬車に坐す日天を正面向きに捉えたもので、日天は両手に各々開敷蓮華を持っている。版本・高雄曼荼羅（空海が請来した曼荼羅の写本を手本として制作された）の日天像を代表例として掲げておく（図1）。向かって右に弓矢を持つ微

闍耶、左に両手を差し伸べるしぐさの日天后が配されるが、日天の腹前に小天部像はない。

ところが空海請来本より古いタイプの胎蔵界曼荼羅の中には、腹前に小天部を伴う日天像が存在する。いずれも白描図像として伝わるのみであるが、まず円珍請来の『胎蔵図像』を挙げよう。『大日経』を漢訳した善無畏が選び出した胎蔵界の諸尊を描き連ねたもので、日天は羯磨衣をまとい七頭だての馬車に乗り、両手に各々開敷蓮華を持っている（図2）。腹前の小天部像は菩薩形で、両拳を胸に当て、左手に細い棒状の持物を持っている。向って左には弓矢を持つ二天がおり、惹野・弭惹野と注記されている。

ちなみに七頭の馬車に乗る日天の例としては、『四種護摩本尊幷眷属像』所載の図（図3）も挙げられる。空海の録外の請来品とみなされ、護摩壇図の他に、胎蔵界最外院の諸尊も描かれている。日天は菩薩形で、両手に開敷蓮華を持つ。小天部像は両手を胸に当てるポーズで、持物はないようである。頭頂部が盛り上がり、如来の頭部のように表されている。

また円珍請来の『胎蔵旧図様』では、二重と四重の二箇所に日天が登場する。二重の日天（図4）は、小天部像のいる五頭だての馬車に乗っている。日天は菩薩形で、両手に各々未敷蓮華を持つ。小天部像は菩薩形で、両手を胸に当てる。四重の日天（図5）は五馬に乗る菩薩形で、両手に未敷蓮華を持つ。小天部像は菩薩形で、両拳を胸に当てている。向って右に弓矢を持つ惹野天、左に矢を持つ尾惹野天が配される。[25]

なお、醍醐寺の『叡山本大悲胎蔵大曼荼羅』の日天（図6）も、小天部を伴う。日天は五頭だての馬車に乗る菩薩形で、両手に蓮華を持ち、その上に日輪を載せる。小天部像は菩薩形で、両手を胸に当てる。向って右に弓矢を持つ微闍耶、左に日天后を配する。円仁請来の図像に基づいた曼荼羅と推測されている。

図１　版本高雄曼荼羅　日天・日天后・微闍耶

図２　胎蔵図像　日天・惹野・弭惹野　奈良国立博物館　建久５年（1194）写

図４　胎蔵旧図様（二重）　日天
個人蔵　建久４年（1193）写

図３　四種護摩本尊幷眷属像　日天
醍醐寺　建暦３年（1213）写

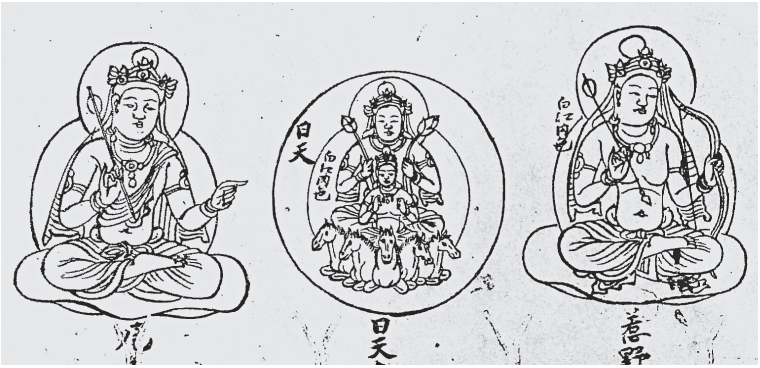

図５　胎蔵旧図様（四重）　日天・蒼野・尾蒼野

図７　スーリヤ神像
ヴァイタル・デオ寺院

図６　叡山本大悲胎蔵大曼荼羅
日天・日天后・微闇耶
醍醐寺　鎌倉時代写

3　日天像の源流

このような、馬車に乗り小天部を伴う日天の姿は、インドの太陽神像に倣ったと考えられる。

インドでは、紀元前二〜一世紀頃から馬車に乗る太陽神像が制作されてきたが、グプタ朝のマトゥラーで図像に大きな転換が生じたという。すなわち馬車が七頭だてになり、御者を伴うケースが現れた。太陽神が両手に蓮華の束を持つのも新しい要素であるという。眷属として、弓矢を持つ二女神が配されることもある。一方で、ペンと紙を持つピンガラ、杖または槍を持つダンダを従える立像が出現し、やがて馬車に乗る像と融合した。さらにポスト・グプタ期になると、蓮華は束状から大きな開敷蓮華に変わるという。[26]

たとえばナチュナーの廃寺から発見された浮彫は、六世紀の作と推定されており、中尊の膝前に御者が上半身をのぞかせる。向って左にペンとインク壺を持つピンガラ、右に杖（または槍）を持つダンダがいることから、中尊は太陽神スーリヤ、御者はアルナに比定されている。またピンガラとダンダの外側に男神がおり、上部には弓を引く女神がいる。

マトゥラーで成立したこの新しい図像は、やがて他の地域にも波及した。東インド、ブバネーシュワルのヴァイタル・デオ寺院のスーリヤ神像（図7）は、七〜八世紀の作と推測されている。[27] 七頭だての馬車に立つスーリヤは、両手の肘を曲げて構え、顔の脇に大きな開敷蓮華を掲げ持つ。膝前の御者は左手で手綱を引き、右手に棒状の持物を持っている。車上には、弓を射る構えの女神が左右に配される。

西インドのエローラ石窟にも、七頭だての馬車に立つスーリヤ神像（図8）があり、八世紀の作とされている。[28] 両

図8　エローラ石窟　スーリヤ神像

手の持物は蓮華と思われる。御者は中央の馬に乗っており、車上には弓を引く女神を伴う（向かって左の女神の持物は破損しているらしく、判別できない）。

これらの作品では太陽神が立像であるが、両手に蓮華を持ち、七頭立ての馬車に乗り、前方に小さな御者を伴う形式が、『胎蔵図像』・『四種護摩本尊幷眷属図像』の日天と一致する。弓矢を持つ女神は、『胎蔵図像』では日天の右脇に二人、『胎蔵旧図様』の四重では両脇に、版本高雄曼荼羅や『叡山本大悲胎蔵大曼荼羅』では左脇に見出される。

胎蔵界曼荼羅の典拠である『大日経』は七世紀末～八世紀初ころ中国に伝来し、開元一三年（七二五）に善無畏により漢訳された。太陽神の図像もまた同じころインドから到来して、曼荼羅の中に採用されたのであろう。表の②項に示すように、『大日経』の注釈書で日天の乗り物を「八馬車輅」と記すのにもかかわらず、『胎蔵図像』や『四種護摩本尊幷眷属像』では七頭の馬車である点も、これらの図像が経軌の文言ではなく実物に依拠したことを物語っていよう。[29]

4　大日経における日天の眷属

ところでインドのスーリヤ神像では、車上に多くの従者がいる例もあるが、『大日経』の日天は二女神のみ従える。ジャヤとヴィジャヤである。『大日経』[30]では、表の③項に示すように、勝妃・無勝妃と意訳し、注釈書では音訳して

表　大日経と注釈書における日天と眷属

経軌／項目	大日経	大日経疏 大日経義釈	摂大儀軌 広大儀軌	青竜寺儀軌 玄法寺儀軌
位置	初方釈天主	釈天眷属之南	次住於初方 東門帝釈天	東門帝釈天
①	左置日天衆。	置日天衆。	左置日天衆	左置日天衆
②	在於輿輅中	在八馬車輅中。	八馬車輅中	八馬車輅中
③	勝無勝妃等	幷二妃在其左右。 所謂誓耶微誓耶。 訳云勝無勝也。	二妃在左右 逝耶毘逝耶 訳云勝無勝	二妃在左右 逝耶毘逝耶
A		日天眷属布諸執曜。 盎伽在西。輸伽在東。 勃陀在南。 勿落薩鉢底在北。 没儞没遮在東南。 羅睺在西南。剣婆在西北。 計都在東北。 又於南緯之南置涅伽多。謂天狗也。 北緯之北置嗢迦跛多。謂流火也。	眷属布執曜 盎伽在左右　輸迦在於東 勃駄在於南 勿落薩鉢底　置於日天北 設儞設遮東南 羅睺在西南　剣婆在西北 計都在東北 南緯之南置　涅伽多天狗 北緯之北置　嗢伽跛多火	
B		〈阿闍梨所伝の曼荼羅〉 東方日天之前或置摩利支天女。 如陀羅尼集出之。	摩利支前行	摩利支在前
④	翼従而侍衛		翼従而侍衛	

誓耶・微誓耶、または逝耶・毘逝耶の字が当てられた。日天の馬車の中にいて④「翼従し侍衛する」と記すことから、インドの作品にみる弓矢を持つ守護女神に相当するが、『大日経』では日天の妃として位置づけられた。ただし実際の曼荼羅では、車上ではなく日天の隣に控えている。

一方、摩利支天は『大日経』そのものには登場しない。しかし表のAに示すように、『大日経』の注釈書では日天の眷属が増広され、そこに摩利支天（表のB）が加えられていく。

すなわち、善無畏の注釈を一行が筆記した『大日経疏』[31]や『大日経義釈』[32]では、胎蔵界曼荼羅最外院の東方尊について述べる箇所で、帝釈天の南にいる日天と二妃について解説し、次いで眷属諸星の名称と位置を列挙する（A）。摩利支天に関しては、阿闍梨所伝の曼荼羅の項で言及し、陀羅尼集経の所説を引用して、日天の前に摩利支天がいる旨が記される。

同じく善無畏による注釈書である『摂大儀軌』[33]と

『広大儀軌』[34]では、眷属諸星（A）に続いて、（日天の）前を行く摩利支天（B）に言及しており、日天の眷属として組み込まれたことがわかる。法全の『青竜寺儀軌』[35]および『玄法寺儀軌』[36]では眷属諸星が省略され、左右の二妃と、前にいる摩利支天のみが取り上げられている。

これらの注釈書は、円仁、円珍、宗叡らによって請来され、胎蔵界を解説する諸書に引用された。そして、「摩利支天は日天の眷属で、日天の前にいる」という認識が浸透し、更に一歩進んで、日天像の前にいる御者を摩利支天とみなす見解が生じたと推測される。安然自身も、胎蔵界法や胎蔵界曼荼羅の解説を著したが、『大日経供養持誦不同』「日天別壇」では、日天を表す八馬車輅の前方に、摩利支天を象徴する宝瓶を置き、その左右に妃の印である弓（と矢）を配した図が付されている。[37]

5　小天部＝摩利支天説の形成

日天の前の小天部像を、疑問形ながらも摩利支天と記した早い文献は、真言僧・真寂（八八六～九二七）の『諸説不同記』の日天の項である。[38]胎蔵界曼荼羅の諸尊について解説した本書において、真寂は『大日経』・『大日経義釈』・『陀羅尼集経』などを引用しながら、日天と二妃・眷属諸星・摩利支天について論じ、さらに「現図」「或図」「山図」等の日天像の実例を挙げて、図像を比較検討している。

「①現図在日天后之左。被天衣。②或図二端飛上。①兩手各向嬭持開蓮。其蓮上各至頭辺。舒小指。②或図掌向外屈四指執。①乗車輅。駕赤五馬。②或図朱輪七白馬。③山図五白馬此図膝前有一小天。両手各執蓮華。疑摩利支天歟。現図無之。此以其隠形不見而不載歟。④然或七曜別図。日月天前皆有一小天。叡山本月天無之。是本為正。⑤

両手竪掌向前屈四指各執開蓮。天衣端飃」（便宜上、①～⑤の番号を加えた）

『諸説不同記』における記述の法則―現図を基準にして或図・山図は相違点を挙げる。座位・身色・着衣・持物・台坐等の順で記述する―を考慮して整理すると、[39]

①「現図」の日天は日天后の左におり、天衣を着けている。両手を胸に向け、小指を伸ばして開敷蓮華を持つ。花は頭の辺りの高さにある。五頭の赤馬がひく車に乗っている。

②「或図」では天衣の二端が上に翻っている。掌を外に向け、四指を屈して（蓮華を）執る。馬車は七頭の白馬で、車輪が朱である。

③「山図」では五頭の白馬であるが、膝前に一小天がおり、両手に各々蓮華を持っている。これは摩利支天か。「現図」には小天が無いが、それは隠形のゆえに姿が見えないので描かないのであろうか。

④「七曜別図」の中には、日天・月天とも前に一小天を伴う例がある。叡山本の月天には（小天が）なく、それが正しい。

⑤（山図の日天は）両手とも掌を立てて前に向け、四指を屈して開敷蓮華を持つ。天衣が翻っている。

ここでいう「現図」は空海請来の曼荼羅とみなされており、『諸説不同記』の記述は版本高雄曼荼羅の日天像（図1）と一致する。一方、「或図」と「山図」がどの曼荼羅に相当するかは確定していない。「山図」の記述に近いのは、『胎蔵旧図様』二重の日天像（図4）である。今では白描図像しか残っていないこのタイプの日天像が、かっては著色の曼荼羅として確かに存在したことを伝えてくれる。

また④では小天を伴う例として、日天・月天ともに一小天を伴う七曜図に言及する。ちなみに七曜の場合、太陽神は日曜、月神は月曜と称されるが、日天・月天と区別しないことも多い。[40] さらに小天がいない叡山本の月天を挙げ、

その方が正しいと判じた。真寂はその根拠を示していないが、日天の二つ先の微闇耶の項の末尾に摩利支天を付け加え、「摩利支天は常に日の前を行く」という『陀羅尼集経』の経文を記している。この文言は、裏を返せば、月天の前には摩利支天はいないと読み取れる。月天の前に小天がいることを否定する態度は、真寂が日・月天前の小天を既に摩利支天と認めていたことをうかがわせる。

⑤は一見すると叡山本の月天に関する記述のようにも見えるが、「山図」の姿勢・持物の記述であり、③の「山図」の台座の記述（五白馬）との間に、一小天に関する考察が挿入されたため、山図の説明が分断されたと考えられる。「現図」や「或図」とは異なる台座の記述を先行したために、このような順序になったのであろう。

これに次ぐ資料としては、平安時代後期～鎌倉時代の真言宗側の口決集から、いくつかの例を見出すことができた。まず、保延六年（一一四〇）に恵什の口決を覚印が筆記した『勝語集』では、[41]「北三胎蔵十巻抄不審事」として、

「日天月天前有小天子。是摩利支天歟。本寺十二天像如此。但後本月天無之。尤好之。此事不可然。不空歟不意。摩利支法日月天前俱有之。」

と記し、十二天像の中にも日天・月天像の前に小天を加えた作例が存在したことが知られる。方位守護神である十二天は、立像を屏風仕立てや掛軸にするケースが多いが、小天を伴っているのならば坐像だったのであろう。なお、「摩利支法」の所説を理由に、月天の前に小天＝摩利支天がいることを擁護している。[42]

時代が下り、建長二年～弘長三年（一二五〇～六五）にわたって伝授された憲深の口決を、親快が筆記した『幸心鈔』「摩利支天事」になると、日天の前の小天部は摩利支天と断定されている。[43]

「師云。図日天之時。人形少加事少少有之。人普不知其由緒　件形非赤子。只チキサキ天女形也。則此摩利支天也。依此隠形之功能。後日天子。不見也。故軌文云。常雖行日天子前。天眼不能見云々」

また、七曜中の日曜・月曜の前に描かれる少天女形も摩利支天と判じた口決がある。弘安の頃（一二七八〜八七）編纂された、教舜の『秘鈔口決』「摩利支天法」である。[44]

「住日月前事

御口云。仏眼曼荼羅七曜中日曜月曜ノヘソノ程ニ少天女形書キタルハ則摩利支天也。意ハ縦ヒ雖モ住日天子ノ前ニ不得見云義表示也」

この二つの資料は、ともに摩利支天に対して「天女形」という言葉を用いており、明らかに女尊とわかる姿をしていたのであろう。菩薩の装束ではなく、長袂衣をまとう姿だったのであろうか。

ところで、法隆寺に江戸時代の日天像が所蔵されている。[45] 五頭だての馬車に乗る日天を斜めの構図で捉えたもので、前方左右に配する弓を持つ天女の一方を横向きに表すなど、絵画性が高い仏画である。日天の膝前には御者がいて、卍を描いた天扇を持っていることから、摩利支天として描いたことが明らかである。「日天の前にいる小天部は摩利支天」という認識が近世にも存続していたと推測されるが、中世〜近世の摩利支天に関する言説についてはより広く資料を探索し、稿を改めて検討することとしたい。

注

（1）大正新修大蔵経　No.一九〇　三巻八〇〇頁

（2）不空が皇帝に白檀の摩利支天像を進上した時の書状が、円照の『代宗朝贈司空大辯正広智三蔵和上表制集』に収録されており、摩利支天の別称として「威光」と記されている。（大正新修大蔵経　No.二一二〇　五二巻八二九頁）

（3）唐代までの摩利支天の経典としては

①梁・失訳『仏説摩利支天陀羅尼呪経』（大正新修大蔵経　二一巻No.一二五六）

②阿地瞿多訳『陀羅尼集経』巻十「仏説摩利支天経」（大正新修大蔵経　一八巻No.九〇一）
③不空訳『末利支提婆華鬘経』（大正新修大蔵経　二一巻No.一二五四）
④不空訳『仏説摩利支天菩薩陀羅尼経』（大正新修大蔵経　二一巻No.一二五五）
⑤不空訳『仏説摩利支天経』（大正新修大蔵経　二一巻No.一二五五の別本）

が知られている。また儀軌として

⑥不空訳『摩利支菩薩略念誦法』（大正新修大蔵経　二一巻No.一二五八）がある。

摩利支天の隠形に関しては、①～⑤がほぼ同様に語るので、例として①の所説を掲げておく（大正新修大蔵経　二一巻二六一頁）。「有天名摩利支天。常行日月前。彼摩利支天。無人能見。無人能捉。不為人欺誑不為人縛。不為人債其財物。不為怨家能得其便」

なお李玉珉氏は、敦煌蔵経洞から発見された写経中に、①の経典と一致する写経が存在し、そこに菩提流志訳と記されることから、①の経典を菩提流志訳と推定された。（「唐宋摩利支菩薩信仰與圖像考」『故宮学術季刊』第三一巻第四期　二〇一四年夏号）

（4）『陀羅尼集経』（大正新修大蔵経　No.九〇一　一八巻八七〇頁）では次のように記す。「似天女形。左手屈臂向上。手腕当左乳前作拳。拳中把天扇。扇如維摩詰前天女把扇。於扇当中作西国卍字。字如仏胸上卍字。字四曲内。各作四箇日形一一著之。其天扇上作焔光形。右手申臂並申五指。指頭垂下。身長大小一寸二寸。乃至一肘（中略）左右各作一侍者。其侍者亦作天女形。」

（5）雍熙四年（九八七）訳　大正新修大蔵経　No.一二五七　二一巻

（6）敦煌出土の摩利支天像が大英博物館に一点、ギメ美術館に二点所蔵されている。長袂衣をまとう天女形で、三本足の烏が住む太陽の前を歩いている。また大英博物館本とギメ美術館本のうち一点は、天扇を持っている。九世紀末～十世紀の作と推定されている。また、陝西省博物館の摩利支天経などを刻んだ碑には、天扇を持つ二臂の摩利支天が太陽の前を進む図柄が描かれている。宋の乾徳六年（九六八）の作である。

（7）近年、宋・元・明代の寺院壁画の中に三面六臂または八臂の摩利支天像が見出され、また敦煌石窟の西夏の作品が相次いで紹介されるなど、中国の摩利支天像に関する研究は大いに発展した。論文が多いので、代表的なものを示す。

①陈玉女「佛説摩利支天经信仰内涵初探」『麦积山石窟艺术文化论文集』下　二〇〇四年六月
②『中国寺観壁画全集6　明清寺院　円覚諸天図』廣東教育出版社　二〇〇九年
③刘永增「敦煌石窟摩利支天曼荼罗图像解说」『敦煌研究』二〇一三年第五期（一〇月）

（8）張宏书「摩利支天造像及其崇拝」『収蔵』二〇一五年六月

（9）森喜子「パーラ朝の女尊の図像的特徴（1）」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』六号　一九九〇年一二月

（10）近年、七頭の猪に坐す摩利支天像については、まとまった研究が発表されている。
織田顕行「清拙正澄ゆかりの摩利支天像をめぐって」『アジア遊学』一四二　二〇一一年五月
織田顕行「禅宗文化圏における摩利支天像の受容と展開—信濃小笠原氏ゆかりの開善寺の事例から」『飯田市美術博物館研究紀要』二七　二〇一七年三月

（11）安然は、天慶六年（八八二）に著した『普通授菩薩戒広釈』において、大乗寺院の上座を論じる箇所で「摩利支天是男天」と述べている（大正新修大蔵経№二三八一　七四巻七六八頁）。安然の説は『東宝記』にも引用されており、ある程度知られた認識だったとすれば、中世以降、摩利支天が男尊化する際に思想的裏付けを提供したかもしれない。

（12）大正新修大蔵経　№二四三三　七七巻四二一頁

（13）『阿娑縛抄』によれば、安然には『摩利支要記』および『摩利支天秘法』という私記があった。本文でも示すように、『阿娑縛抄』では『摩利支要記』から引用している。一方、同じ内容を、真言僧・心覚の『鵝珠抄』では『真言要密記』の名で引用している。覚禅の『覚禅鈔』では「抄云　安然」と記している（大正新修大蔵経図像部　五巻五一九頁）。

（14）大正新修大蔵経　図像部　九巻　四六七～四六八頁。便宜上、A～Fまで記号を加えた。
「摩利支要記　安然云。A不空訳。摩利支天儀軌云。摩利支天菩薩者。是大日三昧耶故入於日喩三昧。即日天眷属○B天台宗所立法華経文云。娑婆世界主梵天王者挙位。次文云戸棄大梵者挙名也。（中略）法相宗所立法花玄賛云。尸棄大梵是小千界主也。（中略）壊劫時起天三災悉破壊第二第三禅等訖文。但不至第四禅定故。此天王時。摩羅幢摂治一切衆生精気。故下界無有情。（中略）C但光音天下化於贍部界。生一子。所謂毘摩質多羅阿修羅王。D是阿修羅王生一女子。其形如天女。端厳甚妙也。其名曰舎脂。以此女欲為羅睺阿修羅王妾也。帝釈天王以神通取此。将至忉利天上。召毘首羯磨天。令造喜見城。経人間七日頃造一萬間舎訖。即以七宝厳飾。以因多羅網覆其舎。毎網目有萬億鈴。鈴光鈴音合於一。即此舎脂女囚置中寝。時二阿修羅

王起引四兵。列見大海上。諸阿修羅王幷百千萬軍衆集会。其蔭現海水底。其数不可究盡。為奪彼舎脂女。上天帝宮。時日月天子放浄光。照耀修羅王両眼眸子。羅睺阿修羅王以手欲執日月天子。摩利支天菩薩有大勢力便。故現人間三歳小児形。覆翳日月天宮。令威猛修羅王迷惑。亦吾以隠形法不令知日月天子及修羅王。恒令帝釈天王悉摧破修羅王軍衆。或説云。摩利支天為助護天帝日月。恒隠其形。懸前如微鳥竹籠。現其世界之形相也。E帝釈天毎月十六日講演大品般若。般若十六神王首深沙大王領引七萬阿僧祇眷属。持智剣。須臾頃割截修羅軍陳若干眷属。即修羅王等五体堕大海水上。如微塵数。時修羅王衆練不死薬。含牙歯中。不敢散失。各有自通力。択取微塵身体。如故活続。帰往本宮。如此恒時雖受苦因勝他心深禁故。毎月十六日闘諍無已。故天帝渇仰般若力。一切諸仏権化皆応称帝釈天所勢。是故摩利支天菩薩。以大方便神通力助護天帝也。F涅槃経八云。如羅睺阿修羅王。以手遮月。世間諸人咸謂月蝕。阿修羅王実不能触。以阿修羅障其明。故是月団円無有虧損。但以手障故使不現。若摂手時世間咸謂月已還生。皆言。是月多受苦悩。仮使百千阿修羅王不能悩之云々」

(15) 心覚は「安然真言要密記云」として、C部とD部①～⑧、E部①～②も収録した（真言宗全書　三六巻　三〇六～三〇七頁）。

(16) 浜田敦編『塵添壒嚢抄・壒嚢抄』（臨川書店　一九六八年）六一八頁
『壒嚢抄』は、日月蝕が起こる理由として、阿修羅が日月を遮ろうとすることが原因であると解説する。その状況説明のため、阿修羅と帝釈天の戦いが語られる。戦いの説話は二種類収録されており、一つは安然の『真言要密記』からC部、D部①～⑧、E部①～②、G部を取り上げている。もう一つは摩利支天が登場しないが、舎脂の婚礼や帝釈天の六陣の構え、阿修羅の戦いぶりなどをより詳細に描写する。後者の話は、治承三年（一一七九）ころ編纂された、平康頼の『宝物集』にも見出される（『大日本仏教全書』一四七巻四二八～四二九頁）。『壒嚢抄』の内容や用語は『宝物集』と共通性が高く、典拠の候補としておく。『宝物集』に先行する文献は、現在のところ確認できていない。

(17) 本文中に挙げた資料以外で、阿修羅を惑わせる摩利支天を語る文献を挙げるならば、天台宗側では『四十帖決』、静然の『行林』、真言宗側では厳覚の『伝授集』、興然の『五十巻抄』、教舜の『秘鈔口決』、澄円の『白宝抄』、亮尊の『白宝口抄』がある。

(18) 大正新修大蔵経　№二四八二　七八巻二四二頁

(19) 不空訳の摩利支天経典については、前掲注3を参照。また中国国家図書館の『仏説摩利支天経』は、明の永楽元年の版本で、

漢訳者として不空と元の沙門・法天の名が併記されている。内容は、『仏説摩利支天経』（大正新修大蔵経№一二五五別本）の冒頭部、中程、末尾を抜粋したもので、各部の間に不空訳とは異なる陀羅尼を挿入しており、この陀羅尼部分が法天の訳になるのであろう。

(20) 大正新修大蔵経　№六四三　一五巻六四六～六四七頁

(21) 大正新修大蔵経　№三八四　一二巻一〇五一～一〇五二頁

(22) 日蝕の原因を説明する箇所で述べられる。すなわち、阿修羅王が天女を見ようとして日光に目を射られたので、手で日輪を遮ろうとした。帝釈天が気づいて戦おうとしたので、阿修羅王は退却した（大正新修大蔵経№七二一　一七巻一〇七～一〇八頁）。また同書一一七頁では、天軍との戦いの際、もし日が天軍の後にいると阿修羅軍は目を射られるので、阿修羅王は手で日光を遮ろうとした。これが日蝕の第三の原因と述べている。

(23) 大正新修大蔵経　一五巻六四七頁。本文中でも示したように、『観仏三昧海経』では阿修羅の娘が夫・帝釈天の浮気を疑い、これが阿修羅王と帝釈天が戦う原因となった。阿修羅軍が圧倒的に強かったが、帝釈天が部下の進言で般若波羅蜜の呪を唱えると、空中に出現した武器が阿修羅軍の上に落下して、耳鼻手足を切り落とした。

(24) 大正新修大蔵経　№二四〇八　七五巻九五六頁

(25) なお、胎蔵旧図様では日天とは別の場所に、天扇を持つ二臂の摩利支天が描かれている（大正新修大蔵経　図像部第二巻五一八頁）

(26) 宮治昭「古代インドにおけるスーリヤの図像について」『仏教芸術』一五六号　昭和五九年九月

(27) Shanti Lal Nagar, *SŪRYA AND SUN CULT*, Aryan Books International 1995, P1.16

(28) 同右　P1.42

(29) 一方、五頭だて馬車の源流は定かでないが、善無畏訳『尊勝仏頂修瑜伽法軌儀』には、日天が開敷蓮華を持ち、五頭だての馬車に乗って円相に坐すという規定がある（大正新修大蔵経№九七三　一九巻三七九頁）。日天の造像に際して幾ばくかの影響を与えたであろうか。

なお中国の日天像は、敦煌の壁画や絹絵の千手観音像・千臂千鉢文殊像・不空羂索観音像・如意輪観音像などに確認される。中尊の上方の空間に、月天と対をなして描かれる。台坐は五頭の馬または蓮華座となっている。いずれも中唐～五代の作とみ

なされている。

(30) 大正新修大蔵経　No.八四八　一八巻八頁
(31) 大正新修大蔵経　No.一七九六　三九巻六三四、六四二頁
(32) 卍新纂大日本続蔵経　No.四三八　二三巻三二六、三三八頁
(33) 大正新修大蔵経　No.八五〇　一八巻八〇頁
(34) 大正新修大蔵経　No.八五一　一八巻一〇五頁
(35) 大正新修大蔵経　No.八五三　一八巻一六二頁
(36) 大正新修大蔵経　No.八五二　一八巻一二四頁
(37) 大正新修大蔵経　No.二三九四　七五巻三五三頁
(38) 大正新修大蔵経　図像部　一巻一二九頁
(39) 松原智美「『諸説不同記』の「或図」と台密の胎蔵図」『美術史研究』第二八冊　平成二年一二月
(40) 版本高雄曼荼羅（胎蔵界）には太陽神が二人登場し、ともに日天とされている。馬車に乗る図（図1）と、三頭の馬に坐し右手に日輪を持つ図である。『諸説不同記』では後者を日曜と解釈する。『叡山本大悲胎蔵大曼荼羅』でも同様である。
　なお、日曜（日天）・月曜（月天）の車に御者が付くことを説く経典がある。『梵天七曜経』である。原本が失われたので、訳者や年代は不明だが、寛信の『小野類秘鈔別巻』に経名が出ることが指摘されており（武田和昭「東寺宝菩提院旧蔵星曼荼羅図残闕」『星曼荼羅の研究』法蔵館　一九九五年）、平安後期には請来されていたのであろう。MOA美術館（東寺宝菩提院旧蔵）の「星曼荼羅図残闕」や『白宝口抄』に一部が引用されており、日天（日曜）が御者のいる五碧馬の車、月天（月曜）が御者のいる五白鵞の車にのると記している（大正新修大蔵経図像部七巻二〇六頁）。
　ちなみに、腹前に小天部を伴う日曜・月曜像としては、東寺観智院所蔵の『護摩爐壇様』所載の図が知られている。太陽像（図9）は正面向きの一頭の馬上に坐し、右手に蓮華、左手は胸前に玉（日輪か）を捧げ持つ。腹前に菩薩形の小天部像が描かれる。太陰（月）像は一羽の鵞鳥に坐し、右手に蓮華を持ち、左拳を腰に当てる。腹前の小天部はやはり菩薩形である。小栗栖常暁の請来に関わるらしい注記があるが、詳しくは研究されていない。
(41) 大正新修大蔵経　No.二四七九　七八巻二一八頁

(42) 小天部を伴う月天像の遺品は、日天像の場合と同様、『胎蔵図像』『胎蔵旧図様』『四種護摩本尊幷眷属像』に見出され、七羽または五羽の鵞鳥、もしくは七羽の鵞鳥車を台座とする。これらの月天像は、本格的な著色の作品とはならなかったようである。そうした中で、鎌倉時代前期の作と推定される山口・国分寺の十二天曼荼羅は、珍しい著色の遺品である。月天は御者のいる五頭立ての白馬の車にのっている。一方、日天には小天部像が付かない。

(43) 大正新修大蔵経　No.二四九八　七八巻七五二頁

(44) 真言宗全書　二八巻　五〇四頁

(45) 『法隆寺の至宝　昭和資財帳6　絵画』所収　図版66（小学館　昭和六一年）

図版出典

1、3　大正新修大蔵経　図像部一巻

2　『天馬　シルクロードを翔ける夢の馬』図録　奈良国立博物館

4、5、6　大正新修大蔵経　図像部二巻

7、8　Shanti Lal Nagar, *SURYA AND SUN CULT*, Aryan Books International

9　大正新修大蔵経　図像部七巻

図9　護摩爐壇様　太陽